

ポーサット（カンボジア）をめぐる歴史地理的環境

北川 香子

はじめに

20世紀末の和平成立とその後の「復興」は、カンボジア現代史の重要なテーマとなってきた。21世紀に入った現在、もはや「復興」とは異なる段階の建設が各地で進み、「復興」の文脈でノスタルジックに語られていた「内戦前の風景」は消滅しつつある。戦争で破壊された国道網の再建にとどまらず、全く新しい舗装道路が全土で切り開かれており、自動車急速に普及している。それまで農村を走り回っていた大きな木の車輪の牛車は姿を消し、わずかに生き残った牛車の車輪は、舗装道路に適応して、タイヤを履かせた小さなものに変化した。道路沿いには電線が走り、携帯電話の普及につれて、電波塔が国境まで配置されている。地方の中心都市の郊外に高層のマンションやホテルが建設されて、市域が拡大し、郡の中心村落もまた、かつては道路わきに2階建てのショップハウスが数軒見られる程度であったものが、今では数階建てのビルや、コンクリートとタイル貼りの新しい家屋がひしめき合い、容積を増大させている。水田や湿地は埋め立てられて、中国語の看板が掲げられた工場用地や新興住宅地に変わりつつある。植民地期に開拓された範囲を超えて、ゴムやコショウ、アブラヤシなどの農園が拡大し、さらに辺境の森林も切り開かれて、キャッサバの畑が広がり、日影一つない更地の敷地の中央に建てられた、いかにも開拓最前線といった風情の高床式の板小屋が点在している。

20世紀末に「復興」されようとしていた「内戦前の風景」は、植民地期、より正確には理事官府が各地に設置され、フランスの植民地支配が直接的に地方までおよぶようになった1880年代後半以降の「近代化」の過程で形成されたものである。そこで本稿では、現在の変化を歴史的に把握するための基礎作業として、トンレー・サーブTonle Sap南西岸に位置するポーサットPousatを取り上げ、交通路に注目しながら、「内戦前の風景」の出現時点にあたる、19世紀末から20世紀初頭の状況を見ていくことにしたい。

ポーサット周辺地図



1. カンボジア域内交通路網のなかのポーサット

ポーサットの町は、カルダモン山地からトンレー・サープ湖に流れ込むストウン Stung・ポーサット川と、プノム・ペンとバット・ダムバーン Bat Dambangを結ぶ国道5号線の交点に位置している。国道5号線の南側に並行して、同じくプノム・ペンとバット・ダムバーンを結ぶ線路が走っている。つまりポーサットは陸路と水路の双方で、プノム・ペン、バット・ダムバーンに連絡する。国道5号線の北西はタイ国境のポイペト Paoy Paetを終点とし、南東はプノム・ペンでベトナム国境に向かう国道1号線に接続しており、20世紀末のカンボジア和平成立以降、とくに21世紀に入ってから、大陸部東南アジアを横断する道路の一部として重要性を増している。

タイ・カンボジア・ベトナムを結ぶ幹線路上の拠点というポーサットの立地は、前植民地期にさかのぼる。国道5号線の原型となるトンレー・サープ南西岸の陸路は、同時代史料で確認できる限りでも、16世紀末から19世紀中頃まで、シャム軍の度重なる侵攻の経路となってきた。一方ベトナムは17世紀後半以降、メコン河・トンレー・サープの水路を主な経路として侵攻をくりかえし、19世紀前半にはトンレー・サープ湖南西岸のポーサットおよび北東岸のコムボン・トム Kampong Thumに砦を構えて、シャム軍の侵攻に備えた。

ベトナムからシャムに向かう経路の情報を記した1810年のベトナム漢文史料『暹羅国路程集録』には、南榮營（プノム・ペン）から「陸行六日」で「六坤鬱（ポーサット）」に至り、「六坤鬱」から「陸行六日」で八尋奔處（バット・ダムバーン）に至るとある

[16:27]⁽¹⁾。1881年1～2月のパヴィー Pavieの踏査録によると、旧王都ウドンOudonとポーサットPursatのあいだには、①プラウ・クラオムPhlau-Ekrom（下の道）、②プラウ・カンダールÉkandal（中の道）、③プラウ・ルー Éleu（上の道）という3本の道があった。①は別名をプラウ・ルオンLuong（王の道）といい、トンレー・サーブ沿いに、その氾濫限界の外側、当時のカンボジア王国のなかで最も人口が多い地域を貫いて、現在の国道5号線にはほぼ重なる軌道を走っていた。道程を均分するように12のドムナックDomnac（休息の家）が置かれ、旅程は象か牛車で6日間であった。②は「アンナム（ベトナム）人による占領期」、すなわち19世紀前半に造られた道で、プラウ・ユオンIuon（アンナム人の道）という別名を持っていた。可能な限り直線的な軌道をとって山中を走っており、「トラムTram（宿駅に対するアンナム人の呼称、ドムナックと同じ）の家」がほかの道よりも短い間隔で設置され、全線にわたって、河川に頑丈な木橋が架けられていた。しかし、チャンChanh（マラリアなどの熱病）に罹る危険性も高いため、パヴィーの頃にはすでに放棄されていた。③は山の反対側にあり、旅程が4日間と短く、特に象を用いる旅行者に好まれていたが、やはりパヴィーの頃にはあまり使われなくなり、手入れされなくなって、ドムナックは消滅してしまっていた。同様にポーサットとバット・ダムバーンの間にも、①下の道、②中の道、③上の道の3本の道があった。①は雨季の一時期には通行できなくなるが、それ以外の時期には最もよく使われ、旅程は4日間であった [11:77-78]。

パヴィーは、「河や湖上は比較的安全」であるので、徐々に水路が好まれるようになり、陸路はあまり使われなくなっていったと記している [11:77]。蒸気船の導入も、この傾向を促進した。メコン河の増水期には湖の氾濫が周辺の森を浸し、大型のサンパンsampanやジャンクjonqueが、航路を短縮したり、嵐を避けたりするために、梢だけを水上に見せている木々のあいだを抜けて走り回った。河川航行用に建造された「中国人の汽艇chaloupe chinoise」は、トンレー・サーブ湖の嵐を嫌って、チノクトルーSnocrou（コムボン・チナンKombong-Chhnang地方）から湖側に進出しようとはしなかった。アンコール遺跡群に向かう観光客用に建造された汽艇と、河川郵船のバット・ダムバーン線の蒸気船だけが、水位の高い時期のみ、湖の全長を往復していた [7:10]。

1899年末にポーサットに着任した軍人の回想録には、サイゴンとアンコール、バット・ダムバーンを往復する河川郵船の定期蒸気船「バット・ダムバーンBattambang号」で、乾季（1899年12月7日）と雨季（1900年9月6日）に、プノム・ベン＝ポーサットの水路を旅行した様子が記されている。乾季の旅ではプノム・ベンを朝7時に出航し、コムボン・チナンを経由して、夕方5時頃にポーサット川の河口に到着した。湖の水位はバット・ダムバーン号の航行に不安なほどに低下していた。船がポーサット川の河口に近づ

⁽¹⁾ 本文中では、典拠は「文献リストの番号:該当ページ」の形式で表示する。ページが付されていない文書類や地図は、「文献リストの番号」のみ表示する。

くと、手漕ぎの丸木舟やサンパンが20隻ほど岸から現れ、下船する乗客と荷物を受け取った [2:109-111]。

バット・ダムバーン号は翌々日に再度ポーサット河口に立ち寄り、乗客を乗せてサイゴンに戻った。この復路便を最後に、7月までの8か月間、水路による連絡は完全に途絶し、ポーサットは「世界中からほぼ孤立する」状況になった。乾季の蒸気船便のターミナルとなるコムボン・チナンまでは、水牛車で72時間を要した [2:119]。20世紀初頭時点でも、ポーサット-コムボン・チナンの道路は盛り土がされておらず、雨季になると浸水し、使用できなくなった。当時の国境のスヴァーイ・ドーン・カエウ *Soai-Donkeo* とポーサットの間も「同様の踏み分け道」で結ばれており、雨季には象でも旅行は危険とされていた [7:10-11]。

1915年のコムボン・チナン理事官の巡察では、2月16日の午後にコムボン・チナンを自動車で出発し、その日のうちにポーサットに到着している [13]。自動車の導入、さらに後の鉄道の建設により、カンボジア域内交通の幹線は陸路に移った。この状況は内戦前まで継続する。UNTAC直後（1994～96年）に筆者が留学していた当時は、内戦による道路・線路の破壊に加えて、クメール・ルージュによる襲撃も頻発し、陸路の移動は危険とされていた。プノム・ペンとバット・ダムバーン、アンコールとの連絡は飛行機便が主であり、雨季にはスピードボート便が、飛行機便よりは安価な交通手段として利用された。ポーサットはこの双方の航路から外れていたため、この時期には再度孤立する傾向にあった。

2. ポーサット域内の交通路と景観

植民地期の地誌では、ポーサット地方を北から南に、①「低い地区」、②「中間の地区」、③「高い地区」に3分する [1:228/7.7-8]。①はトンレー・サーブ湖に接し、雨季に浸水する森や灌木の林、イグサの平原に覆われ、「人は住まない、住むことができない」地域であった。②は「寂しく荒涼とした」疎林や、「象が隠れるほど」の丈の高い草に覆われた、広大無辺の平原の風景が特徴的であった。湖の氾濫限界の外側ではあるが、ストウン・ポーサットなど地方を貫流する河川の一時的な溢水を被ることがあった。河川沿いや林間の空き地には、水田に囲まれた村々が散らばり、地方の人口集中地となっていた。現在の中心都市ポーサット、そして国道5号線と線路はこの地区内にあるが、周辺には水田が広がり、高い草の平原はすでに消滅している。③は「プノム *Phnom* (山)・ポーサット」、あるいは「プノム・クラヴァン *Kravanh* (カルダモン)」と呼ばれる山岳地域である。プノム・クラヴァンは「カルダモンが生えている山々」の総称で、ポーサットの南西から始まり、西のチャントブン *Chantabun* の方角まで延びている。ストウン・ポーサットのほか、プノム・ペンの南でバサック *Basak* 河に流れ込むブレーク・トナオト *prec Thnot* や、バット・ダムバーンを流れるストウン・サンカエ *Sangké* など、カンボ

ジア内陸の主だった河川の源流地になっている [11:91]。

(1) 「低い地区」：湖からポーサットまでの水路

『ポーサット地誌』によると、ストウン・ポーサットの流量は乾季と雨季で大きく異なり、河況が変化しやすいため、商業用の汽艇は進入できず、行政府の汽艇だけが、ポーサットやコムボン・ルオン *Kompong-Luong* まで遡航することがあった。雨季の数か月間のみ、大型のジャンクが川を盛んに往来し、プノム・ペンやサイゴンに米を運んだ [7:8-9]。

湖からポーサットまでの水路の状況は、前述の軍人の回想録に描写がある。乾季(1899年12月)の旅は湖からポーサットまでの上りで、所要時間は22時間とされていた。日没の頃に河口に到着し、手漕ぎのサンパンに乗り換えて、木の油を塗った草の松明で航路を照らしながら、蔓が巻きつく巨木の森のなかを進んだ。漕ぎ手たちは午前2時に船を停め、川岸のサーラー *sala* (休憩所) で休息し、午前5時に再出発した。やがて森が途切れ、日影が消え、視界には兩岸の砂の土手のみが続くようになった。進むにつれて川底が浅くなり、砂に乗り上げた舟を押し引きすることもあった。午後5時頃に、漕ぎ手が前方1kmほどに翻る三色旗を指し示し、ポーサットに到着したことを知らせた [2:111-116]。雨季(1900年9月)の旅はポーサットから湖までの下りで、川の水位がかなり上昇していたため、舟足は速かった。午前2時頃から5時過ぎまで、カンチョー *Kanthior* の寺で休憩した。その後は氾濫した川水の上に梢だけが出ている大木の森のなかを、川筋にこだわらずに真っ直ぐに航行した。午後2時頃に、漁をしているジャンクの「巨大な稲藁の帆」が視界に入ってきて、湖に到達したことが分かった。湖は漁期を迎えて大変に賑わっており、サンパンの村が湖上に出現していた。一行はポーサット川の入り口を示す浮きサーラーに舟を横付けし、「シャム (バット・ダムバーン、アンコール)」からやってくる蒸気船を待った [2:177-178]。

(2) 「中間の地区」：ストウン・ポーサット沿いの陸路

1915年2月に、コムボン・チナン理事官がポーサットからコッ・コン *Kas Kong* までカルダモン山地を縦断する巡察を実施した。一行はポーサットを2月17日の朝7時に出発し、ストウン左岸に沿って、地方道路31号線を進んだ。経路上の村々は以下の通りである [13]。なお②ローローク・サー、③ブーム・ストウン、⑤リエチと⑥コムボン・ルオンに関しては、1921年の巡察報告書があり、より詳細な情報を得ることができる [14]。

- ①ブレーク・スデイ *Prek Sdey* 集落 (現クム・ローローク・サー内)。
- ②ローローク・サー *Loloksar* 村：マレー人と中国人が住む、かなり大きな村。

1921年の巡察報告書によると、地方道路31号線の開通によって収穫物の輸出が可能になったため、この村への移住と水田開発が進んだ。クム *khum* (行政村)・ローローク・

サー^{Lolocksar}に所属するプーム^{Phum}（集落）は7、人口は2,549人⁽²⁾（カンボジア人2,005人、アンナム人218人、中国人157人、中国系カンボジア人71人、マレー人98人）であった。マレー人はプーム・プレーク・トナオト^{Prek Thnot}とチラン・チョット^{Chrang Chot}に集中していた。「40年近く住んでいる中国人の有力者」が建てた旅行者用のサーラー（宿）が1、トアンマユット^{Thomayut}派の寺院が1、中国寺院が1あった。

③プーム・ストウン^{Poum Stung}村：ポーサットから7km⁽³⁾地点で31号線を離れ、ポーサット川の浅瀬を渡った。

プーム・ストウンを含むクム・プサー・ルー^{Phsarloe}（現在はクム・ローローク・サー内のプーム）の1921年報告書によると、このクムに属するプームは9で、人口は1,862人（カンボジア人1,617人、中国人113人、中国系カンボジア人41人、アンナム人86人、マレー人5人）であった。モハーニカーイ^{Mohanikai}派の寺院が3（プーム・ストウンのワット・アエク^{Vat Ek}、プーム・プサー・ルーのワット・ヴィエル^{Veal}、プーム・ワット・ルオン^{Luong}のワット・ルオン）あり、ワット・アエク寺院の傍らに、木造瓦葺の旅行者用のサーラーがあった。中国人が所有するレンガ工場が2あり、ほぼ中国人のみが雇われていた。

④サーラー・チラー^{Chhlar}：ポーサットから約12km。10時半頃到着、14時15分頃出発。

⑤リエチ^{Leach}村：コムボン・ルオンに到着する直前に通過した。中国人の商店が数軒あった。この地域の「商業活動の末端地点」で、シャムとの国境までの領域に分布する「最も僻地の集落」の住民が、米、アルコール、塩などの生活必需品を購入するために訪れるほか、「マレー人の材木商」が毎年買い付けに訪れた。

⑥コムボン・ルオン：初日の宿泊地。サーラー・チラー経由でポーサットから27km。17時到着、翌日6時出発。なおパヴィーの踏査録によると、コンボン・ルオンはポーサット川を形成する2河川の合流地点に位置し、当時はパイリンから来た「ビルマ人」たちが小センターを形成し、山地での宝石鉱脈の探索を始めていた [11:91-92]。

1921年の巡察報告書によると、クム・リエチにはプームが16あり、人口は2,572人（カンボジア人2,088人、ラオ人165人、マレー人146人、中国人95人、中国系カンボジア人66人、アンナム人12人）であった⁽⁴⁾。ポーサットからリエチまでの距離は約35kmで、交通の便は比較的良好、高水位期にはストウン・ポーサットをコムボン・ルオンまで遡ることができ、乾季には地方道路31号線で8km地点の「ワット・アエクの高み」まで行き、川を渡った後、チラー^{Chla}のサーラー（18km）とカムパエン^{Kompeng}（20km）を経由してリエチに至った。リエチは中心地ポーサットに次いで重要なセンターであり、「大理石の山」と「カルダモンの山」への道の交点に位置する「高い地区の市場」であって、

⁽²⁾ 1998年センサスによると、クム・ローローク・サー^{Lolok Sa}の人口は8,955人 [10:251]。

⁽³⁾ 距離は史料によって相違があるが、原文のまま記した。

⁽⁴⁾ 1998年センサスによると、クム・リエチの人口は8,852人 [10:249]。

中国系の住民が商業活動を独占していた。彼らの店は商品が豊富で、木の油と米の取引に特化しており、これらの産物を自分たちの倉庫に保管して、ストウンの水位が上昇し、ポーサットまでジャンクで輸送できるようになる時期を待っていた。高い地区からの隊商路沿いに、木造瓦葺の旅行者用のサーラーが4軒あった。1軒目はプーム・コムボン・ルオンのストウン左岸、2軒目はその正面の右岸にあり、3軒目は1人の中国人が建てたもので、カムパエンにあった。4軒目はポーサットとリエチのほぼ中間、チラーにあった。「高い地区」ではマラリアが重大な問題であるため、理事官はリエチのメー・クム *Mékhum*（行政村長）にキニーネの備蓄を常備させていた。

⑦ヴィエル・ニムトリエ *Véal Nimtrea*：10時到着、14時半出発。ほとんど水田はなく、ストウンの岸にチャムカー *chamcar*（畑）がいくらかあった。

⑧ロヴィエン *Rovieng*：2日目の宿泊地。17時半到着。踏破距離25km。さほど大きくない村。この村を出発すると、「景観が突然に変化した」。

(3) 「高い地区」：カルダモン山地

1915年2月の巡察では、ロヴィエン以降の旅程で以下の土地を通過している [13]。

①ロヴィエン：7時出発。

②トラペアン・ポン *Trapong-Pong*：踏破距離10km。10時到着、翌日6時半出発。20軒ほどの家があり、全てカンボジア人が住んでいた。ストウン右岸の木影に位置しているので、いくらかのチャムカー耕作ができた。家々の背後100m程の山麓に谷があり、水田に耕作されていた。収穫量は自給用にも全く足りないもので、木の油やカルダモンの採集によって収入を得て、不足分を購入した。村は3頭の象を所有しており、通常はカルダモンの輸送や野生象の捕獲に利用していた。この村を出発すると山岳地帯に入った。

③ストウン・オクニャー・ベン *Stung Oknha Ben*：10時半到着、翌日6時15分出発。村はない。バラット *Balat*（知事の副官）が建てた仮小屋に宿泊した。以降、ヴィエル・ヴェーン *Véal Veng*に到着するまで、家屋は見られなかった。ここを出発すると分水嶺を越え、ストウン・ポーサットの谷からストウン・ルセイ・チルム *Russey Chhrum*の谷に入った。

④スラエ・プラン *Sre Prang*：11時到着、翌日6時半出発。仮小屋に宿泊した。

⑤ストウン・チロー *Chrau*：10時半到着、13時半出発。カルダモン地域に入った。前年のカルダモン採集のために建てられた仮小屋が随所に見られた。

⑥ストウン・プルク *Phlout*：踏破距離約25km。16時半到着、翌日6時半出発。

⑦ヴィエル・ヴェーン村：10時到着、翌日6時半出発。30軒ほどの家からなる村で、全てカンボジア人であった。水田があり、かなり多くの水牛が草を食んでいた。収穫量は自給用に足りず、住民たちは森に入ってカルダモンと食糧用の野生の芋を採集していた。生活必需品の買出しには、リエチまで行く必要があった。巡察団がアルコールと塩を分配すると、とくに後者が喜ばれた。この巡察団は住民にとって、13年前のポーサットの

理事官による巡察以来のヨーロッパ人の来訪となった。村の近郊には寺があったが、僧侶はいなかった。この村を出発後、ポーサットとコッ・コン、コムボン・チナンとコムポート *Kampot* の境界となっているストウンを渡った。

⑧ルセイ・チルム：12時半到着、翌日6時半出発。かなり大きな村。住民はいくらかの水田を耕作し、わずかなトウモロコシを栽培し、藤黄 *gomme-gutte* を採集した。一行は寺のサーラーに宿泊した。僧侶はいたが、仏像などはなかった⁽⁵⁾。

(4) 「高い地区」：大理石の山

1918年4月には、ポーサットの理事官が「大理石の山」を巡察した。ポーサットから「大理石の山」の麓にあるタサイ *Tasay* 村までは2本の道があり、巡察にはリエチとクサン *Khsang* を経由する道を使用した。この道では全体の3/4の行程にあるコムノム *Komnom* まで、荷車を使うことができた。もう1本はポーサットから直接サントレー *Santré*⁽⁶⁾ に向かい、タサイから12kmのアムピル *Ampil* まで荷車を使う道であった。

一行は4月25日4時に理事官府を出発し、80～85kmを30時間で踏破し、翌日11時に「大理石の山」の麓に到着した。道中の景観は以下の通りである [15]。

①ポーサットーリエチ：28km。4時出発、7時30分ワット・スパウ・リーク *Sbauv Rik* (リエチ) 到着。途中4時20分にワット・アエク (プサー・ルー) に到着し、4時30分に川を渡った。

②リエチープーム・チニット *Phum Chinit*：10～12km。7時50分出発、9時30分到着。風景は変わらない。疎林と所々に小さな竹やぶがあった。

③プーム・チニット：9時30分到着、昼食をとり、15時20分出発。コムボン・ルオンの下流でポーサット川に合流するストウン・チニットに面した集落で、数軒の家からなる。5～6km南のロカート *Rokat* 村⁽⁷⁾ に属していた。住民は水田耕作し、森林産物を採集した。

④クサン：プーム・チニットから13～14km。17時20分到着、翌日5時30分出発。大理石の山が属するクムの中心地。村には8～10軒の家があるのみで、家屋は7～800mの狭い谷の間に散らばっていた。クムの中では最小の集落だが、中央に位置していることから、川に面していることから、メー・クムの居所として選ばれた。住民は自給用の米を栽培し、いくらかのチャムカー耕作をする一方で、森林産物に依存していた。クサンを過ぎると、60～100m高の小山群の山腹を通った。

⑤ブレイ・クマン *Prey-Khmang*：クサンから7km。6時30分に通過。クサンに属する集落。

⁽⁵⁾ その後の旅程に村落の記述はない。ルセイ・チルムから4晩目の宿泊地クバル・ブレイク・コッ・ポー *Kbal Prek Kas Por* より下流は船舶の航行が可能になり、蒸気船「ラ・ヴィジラント *La Vigilante* 号」でコッ・コンに出て、海路を進み、カエプ *Kep* で上陸して、自動車で、コムポート経由で帰還した。

⁽⁶⁾ 1998年センサスによるとクム・サントレーの人口は3,618人 [10:250]。

⁽⁷⁾ 1998年センサスによると、クム・ロカートの人口は4,381人 [10:250]。

- ⑥コムノム：プレイ・クマンから8km。7時35分到着、7時50分出発。クサンに属する集落。プレイ・クマンより大きく、30軒ほどの小屋があった。住民はわずかな米を作り、丸木舟の製作や、森林産物（肉桂、沈香、樹脂）の交易を行った。荷車の終点。
- ⑦アンカイ *Angkhai*：コムノムから7～8km。9時に通過。森の中にある村。
- ⑧タサイ：アンカイから10～12km、山が迫った狭い谷のなかを進んだ。11時到着。「大理石の山」の麓の集落。10人ほどの登録民⁽⁸⁾がいた。家々は、森に覆われた山に前方を塞がれた、幅が3～400mの狭い谷のなかにあった。開村は少なくとも100年は遡るといいう。村の正面、北一北西に向かって位置する小さな山群が、「大理石の山」、プノム・トマー・カエウ *Phnom Thmâr Keo* と呼ばれていた。タサイには大理石の加工職人が2人おり、非常に原始的な旋盤と鋸、古い鑢を用いていた。

(5) 小括

以上の情報を整理しておく。1915年時点で、国道5号線の原型となる道路には自動車を導入されていた。しかしポーサット地方内に自動車道はなく、陸路の移動手段は徒歩、牛・水牛車、象に限られていた。水路は雨季のみ使用可能で、ポーサットを超えてコムポン・ルオン（リエチ）まで、大型のジャンクやサンパンが進入することができた。

「低い地区」に位置する村落の情報はない。ポーサットより下流では、19世紀末の回想録にカンチャという地名が現れる。21世紀初頭に刊行されたポーサット地方の道路地図を見ると、カンチャは道路の終点、村落が存在する地域の末端に位置している [4/12]。中心地ポーサットはもちろんのこと、「中間の地区」の主要な村落であったローーク・サーとリエチも、クムとして現在まで存続している [10:249,251]。とくにリエチは2河川の合流点かつ「カルダモンの山」への道と「大理石の山」への道の合流点に位置し、「高い地区の市場」の役割を担っていた。現在のプノム・クラヴァン郡の郡役場は、リエチに置かれている [4/12]。

リエチより内陸、「カルダモンの山」側では、20世紀初頭時点で、山岳地帯の入り口のロヴィエン、その奥のやや開けた盆地に位置するヴィエル・ヴェーンのあいだに集落はなかった。この2地名は前述の道路地図にも現れる [4]。ヴィエル・ヴェーンはカルダモンを産する地域の中心にあり、その背後はタイ湾岸に広がるコッ・コン地方との境界、トンレー・サーブ湖側とタイ湾側の分水嶺になっている。一方「大理石の山」側では、ロカートとサントレーのみが、20世紀末～21世紀初頭の地図やセンサス報告書に現れる [4/10:250/12]。コムノムとアムピルは確認できないが、この地点までは荷車を使用できたというので、山岳地帯の入り口に位置していたことが分かる。「大理石の山」のコムノムと「カルダモンの山」のヴィエル・ヴェーンは、20世紀初頭時点でいずれも30軒程度の集落規模であった。また双方ともに米の収穫量は自給用に足りず、森林産物

⁽⁸⁾ おそらく徴税名簿に登録された成人男性。

の採集が主要な生業となっていた。森林産物を生活必需品と交換するためには、リエチの市場まで出て行く必要があった。

以上からストウン・ポーサットの流域では、山間に位置するヴィエル・ヴェーンとコムノム（クサン）が森林産物が集荷される第1のセンターで、陸路水路ともに合流点に位置するリエチが商人の手に森林産物が引き渡される第2のセンター、さらにカンボジア国内の水陸幹線に接続するポーサットが第3のセンターで、地方の政治的中心地でもあるという配置であったことが確認される。ポーサットから先は、カンボジアという国全体の政治的・経済的中心地であるプノム・ベンを経て、仏領インドシナの本コン流域およびタイ湾岸域の中心都市であったサイゴンへと接続していた。

3. アンコール期以前のポーサット

アンコールやサンボー・プレイ・コック *Sambor Prei Kuk* など、アンコール期、プレ・アンコール期の有名な遺跡群を擁するトンレー・サーブ湖北岸とは対照的に、トンレー・サーブ湖南岸のポーサットは、同じく国道5号線上に位置するポスト・アンコール期の王都ロンヴェーク *Longvek*、ウドンとの関係が密接である一方、アンコール史、プレ・アンコール史のなかではほとんど存在感を持たない。しかし21世紀初頭に作成された『カンボジア考古学目録』の「ポーサット、バット・ダムバーン地方」からは、以下のようなアンコール期以前の遺構の存在が確認できる [6:8-16]。

ストウン・ポーサットの周辺では、左岸に広がる水田地帯のなかに、国道5号線の南北にまたがって遺構が分布している。北側には、カンディエン *Kandieng* 郡スラエ・スドック *Srae Sdok* 村のワット・ブレア・ティエト *Vat Preah Theat* を始め、5か所の遺構が記載されている。南側には、バカン *Bakan* 郡トラペアン・チョーン *Trâpeang Chong* 村ブレア・カン *Preah Khan*、同郡スナム・ブレア *Snam Preah* 村ワット・ポー・ミエン・ボン *Pô Meanbon* を含めて8か所の遺構が記載されている。

地方の西端、バット・ダムバーン地方との境界をなすストウン・スヴァーイ・ドーン・カエウ近隣には、バカン郡ロムレチ *Romlech* 村ブラサート・ドーン・アン *Don Ân* を始め5か所の遺構がある。ストウン・スヴァーイ・ドーン・カエウが地方の境となったのはポスト・アンコール期であるので、この地域の遺構に関しては、バッド・ダムバーン地方の東部と連続する可能性を配慮すべきであろう。

地方の東部、クラコー *Krakor* 郡には3か所の遺構が記載されている。

以上の遺構は全て、「中間の地区」に分布している。前述の1915年2月の巡察報告書には、カルダモン山中のヴィエル・ヴェーン村に「文字が刻まれた石」があり、「シャムの境界確定ミッションが作った地図」上に記載されていたとある。この石はもともと山頂で発見されたものが平原に下ろされ、住民たちの信仰の対象となっていた。巡察団が見たところ、何らかの特徴があるものではなく、碑文も消失してしまっていた。さらに「シャ

ムの境界確定ミッションが作った地図」には、「スラッ・バン・ダン *Srah Banh Dang* の遺跡」が記されていた。これも巡察団が見たところ、建造物の跡は何も残っておらず、スラッ *Srah*（方形の池）の周囲を取りまく盛り土の道だけが残存していた [13]。これらがアンコール期以前の遺構であるならば、現在のストウン・ポーサットの川筋よりもやや西側に、カルダモン山地からトンレー・サーブ湖に至る古代のセンターの連鎖が見いだせるのかもしれない。

4. ポスト・アンコール期のポーサット

上記の遺構のうちワット・プレア・ティエトとワット・ポー・ミエン・ボン、植民地期に作成された『ポーサット地誌』では「寺院」という章に収められている。ワット・プレア・ティエト *Prea Theat* に関しては、17世紀初頭に在位したチェイチェッター *Prea-Chey-Chessda* 王が王母のティエト（遺灰）を納めるために建てさせたという伝承、ワット・ポー・ミエン・ボン *Po méanbon* に関しては、16世紀前半にチャンリエチエ *Chau-Phnhea Chau-Reachea* 王が創建したという伝承が付されている [7:44-46]。筆者は1999年2月に行った現地調査で、プレア・カンのほか、ワット・プレア・ティエトとワット・ポー・ミエン・ボンにもアンコール期以前のものと見られる遺物・遺構が残存していることを確認した。『ポーサット地誌』が後者2つを「寺院」の章に収めているのは、ポスト・アンコール期に創建されたという伝承の存在と、『王朝年代記』の記述が理由であろう。『王朝年代記』では16世紀前半のチャンリエチエ王に関連するエピソードとして、ポーサットのワット・ポー・ミエン・ボンとネアク・ター・クレアン・ムアン *Neak Ta Khleang Muang* が現れる。ワット・ポー・ミエン・ボン（威力ある菩提樹の木の寺）は、王がシャム軍を撃退したとき、枯死した菩提樹の木に新芽が出るという瑞兆があった場所を記念して建てた寺院であり、ネアク・ター・クレアン・ムアンは即位の際の内戦で王を助けた将軍が、後にネアク・ター（精霊）に化したものとされている [5:5-6]。

『ポーサット地誌』の「寺院」の章には、①ワット・プレア・ティエトと②ワット・ポー・ミエン・ボンのほかに、理事官府から300mほどのところにある③ピエル・ニエーク *Peal-Nhek* と④ブレイ・ニー *Prey Nhi*、⑤スバウ・リーク *Sbau Rik*、リエチ近くの⑥ブレイ・クロン *Prey Klong*、⑦ワット・ルオンが挙げられている [7:44-46]。③④⑥はチェイチェッター王治世に創建されたという伝承が付されており、とくに⑥はシャムで虜囚となっていた王が1617年に帰還したときに建てられたという。⑤は「ポーサットに第1の宮廷があった時代」、すなわちチャンリエチエ王治世まで遡るとされ、シャム軍の標的とされることを避けて、寺名をスラー・カエト *Sla-khet* から変更したとされている。⑦はそれらよりも新しく、19世紀中葉、植民地化前夜のカンボジア王であったアン・ドゥオン *Ang-Duong* によって、「1841年に彼がシャムから戻ったときに野営した地」に創建

されたと記される。

さらに『ポーサット地誌』には「砦・城塞」という章があり、①バンティエイ・チェイ *Bunteai-Chey*、「アンナムの砦」3か所すなわち②ストウン・ポーサット右岸、理事官府正面のプサー・クラオム *Phsar-Crom*、③ポーサットから3kmのストウン・チャス *Stung Chaes*、④川沿いのバンティエイ・ユオン *Banteai Yuon*、そして⑤バット・ダムバーン・ポーサットの道のブン・チューク *Bong Chhouc* とブン・バト・カンダール *Bong Bat Kandal* の間に設けられた堡、⑥ポーサットから10kmのプサー・ルー *Phsar-Loeu* に位置するバンティエイ・リエチ *Bunteai-Leach* の砦が挙げられている [7:43-44]。①バンティエイ・チェイは「今日も痕跡が見られる最も古い砦」であり、16世紀初頭のチャンリエチエ王と関連付けられている。②～⑥はアン・ドゥオン王が即位した際のシャム・ベトナム戦争の遺構であり、うち②③④はベトナム側が川からやってくる敵に備えて設けたもの、⑥はシャム側の將軍ボディン *Bodin* が建設したものとされている。

これらの寺院や砦、ネアク・ターは「中間の地域」にあり、伝承では16世紀前半のチャンリエチエ王、17世紀初頭のチェイチェッター王、19世紀中葉のアン・ドゥオン王が建立者とされ、シャムとの戦争というエピソードが付随している。カンボジア史のなかでは、この3王はポスト・アンコール期の「中興の祖」とされる英雄で、いずれもシャムから帰還し、戦乱を鎮めて即位したという経歴を持つ。チャンリエチエ王はロンヴェーク王都の建設者、チェイチェッター王はウドン王都の建設者、アン・ドゥオン王は最後のシャム・ベトナム戦争の末に即位し、戦乱で荒廃したウドン王都を現在の形に再建し、現在に続くカンボジア王国の領土的・文化的基盤を築いた王である。

5. 植民地期のポーサット

(1) 理事官府の設置

1907年に西隣のバット・ダムバーン地方⁽⁹⁾がシャムから「返還」されるまで、ポーサットは国境に接する辺境の地方であった。理事官府設置以前、すなわちフランスの直接的な植民地支配がおよぶ以前のポーサットは、パヴィーによって、「ほとんど無人の巨大な地方の中心地」、「ストウン・ポーサットの両岸に並ぶ100軒ほどの小屋からなる」、「〔常設の〕市場はなく、季節になると何人かの中国人がやってきて、クラヴァン山で採集されたカルダモンと、〔ストウン・ポーサット〕川の左岸にひろがる巨大な平原で収穫された米を買いつける」などと描写されている [11:89]。

1887年にポーサット理事官府が創設され、同年1月11日に最初の理事官が着任した [7:55]。前述の1899～1901年の回想録では、ポーサットのヨーロッパ人は理事行政官1人、副領事1人、郵便局長1人、税関の官吏2人と、砦の駐屯部隊のみであったとしてい

⁽⁹⁾ 1794年にシャムに「割譲」された。

る [2:118]。1905年1月1日時点のポーサット地方のフランス人人口は、官吏とその家族19人、将校4人、下士官および兵士49人の計72人であった⁽¹⁰⁾。ヨーロッパ人の入植者も実業家もおらず、常駐の医師もいなかった。現地人人口はカンボジア人27,199人、マレー人284人、ラオ人188人、中国人1,845人、アンナム人1,791人の計31,307人であった [7:57-58]。1934年1月1日時点では、カンボジア人63,062人、アンナム人5,508人、中国人3,845人、マレーあるいはチャム人3,138人、ラオ人323人、ヨーロッパ人22人の計75,898人であった。ポーサットの町の人口は1,041人で、カンボジア人625人、アンナム人149人、中国人248人、ヨーロッパ人19人であった [9:49-50]⁽¹¹⁾。現地人人口が30年で2倍以上に増加しているのに対し、ヨーロッパ人住民は植民地期を通じて20人程度の官吏を基本とし、全く増加していないことが注目される。

上記の軍人の回想録には、最初期の理事官府や砦の風景が記されている。彼らが駐屯する小砦はストウンの岸にあり、浅い堀と、銃眼を穿ったレンガ塀に囲まれていた。内部には士官用の住居1棟、トーチカ1棟、哨所1棟、他に厨房やパン焼き場などがあった。砦の背後、数百メートルのところに運動場があり、ヨーロッパ人墓地を兼ねていた。そこには30人程度の植民地官吏あるいは兵士の墓があったが、彼らの死因は戦死ではなく、気候や疫病であった。砦には銃40丁、それぞれに銃弾120発、予備の弾薬4,800発、総計9,600発が配備され、節約すれば3日間持ちこたえられる計算になっていた。さらに理事官の指揮下にカンボジア人民兵150人がいた [2:124-126]。

小砦を出て右手、ストウン・ポーサットの上流方面に進むと、最初に「四角く、白く、日当たりの良い」、理事官府の建物があった。少し離れて、「カンボジア人の住居と同じ様式で杭上に建てられた」、郵便電信局があった。その先は中国人村で、その入り口に、広い広場を囲むようにして、「板造のバラック」のカンボジア人民兵の兵舎が建てられていた。このバラックに背を向けるようにして、民兵たちの指揮官の住居である「瀟洒な木造の小屋」があり、続けて副領事の「平凡な家」と、塩の貯蔵小屋を前面に備えた、税関官吏の家があった。さらに「寺院に続く道」を少し行ったら、税関の下級官吏の小屋があった。中国人村は砦から数百メートルのところから始まり、30人程の住民がいた。3～4軒の商人の家が「通常の中国の建築」で、それ以外は「半ばカンボジア、半ばアンナムの藁小屋」であった。村には中国人が経営する米の酒の製造所、食料品店1軒、アヘン窟があった [2:133-134]。

(2) ポーサット駐留のフランス人の交際

同じ回想録からは、ポーサット在住のフランス人たちの生活および交際的一端もわか

⁽¹⁰⁾ 中心地ポーサットに70人、スヴァーイ・ドーン・カエウ *Soai Don Keo* に1人、アンロン・コーク *Anlonh-Kok* に1人いた。

⁽¹¹⁾ 1998年センサスによると、ポーサット地方の人口は360,445人 [10:241]。

がえる。公式の行事には①着任直後の挨拶 [2:120]、②クリスマス（12月24日）の夜会 [2:131]、③新年（1月1日）の夕食会 [2:135]、④理事官府が主催する狩猟 [2:141]、⑤国祭日（7月14日）[2:171-176] などがあった。①着任直後の挨拶で招き入れられた理事官の「自宅」には、「広く美しい食堂」に、「対になったチーク材の台座の上に置かれた象牙」や、「壁に吊り下げられた巨大な豹皮」などの「珍奇な物」が置かれていた。②クリスマスには駐屯部隊を率いる中尉のみが理事官府の夜会に参加し、下士官以下は皆で夜会を催した。③年始にはポーサット在住のヨーロッパ人官吏たちとともに、下士官たちも理事官府の夕食会に招待された。⑤7月14日の国祭日には、砦の射撃練習場の前に藁小屋の「観覧席」が設けられ、朝8時半から、官吏たち、砦の中尉、下士官たち、現地人知事たちに取り巻かれて理事官が着座し、競馬、牛車の競走、象の競走を見物した。その後、現地人知事とメー・スロック *Mé-Srok*（村長）たち⁽¹²⁾に氷入りの食前酒がふるまわれ、彼らが村に戻った後、理事官は砦で兵士たちとともに昼食をとった。午後3時に「民兵の広場」に移動し、藁小屋の下でカンボジア人の楽師たちが奏でる「奇妙な楽器」や、丸木舟の競艇などの娯楽を楽しみながら、夜までヨーロッパ人と現地人の交流の場が持たれた。夜7時から、砦で兵士たちによる演劇が行われた。とくにその第2部では、1870年の普仏戦争中のエピソードが演じられている。

回想録のなかで、理事官が現れるのはこれらの機会のみである。砦の下士官が日常の交際相手としていたのは、民兵隊長と税関官吏であった[2:135-136]。民兵隊長の家では、家の周りを囲む大きなベランダに面したドアや窓を全て開け放ち、瓶ビールを飲んで楽しんだ。より親しく交際していたのは税関官吏で、下士官たちは毎晩のように彼の家を訪れた。彼らの目的の1つは税関官吏の現地妻であるアンナム人女性で、彼女が「見事な技法で」アヘンのパイプを準備する様や、サイゴンの「聖幼子学校 *Sainte-Enfance*」で学んだ片言のフランス語で、現地妻たちのゴシップ話をする様を楽しんでいた。

現地人社会との接触・交流には、①着任時にポーサット川を遡行したサンパンの行程 [2:112-115]、②2月始めのアンナム人と中国人のテト *Têt*（新年）の祭り [2:137-139]、③乾季の終わり頃、コレラが猛威をふるう最中に対岸の仏教寺院で行われた火葬式と、その帰路に見かけた民家での悪霊払いの儀式の見物 [2:159-161]、④同時期に砦の入り口から見物した、悪霊払いのための筏流しに向かうアンナム人と中国人の行列 [2:162-163]、⑤狩猟の帰路に立ち寄った寺での僧侶たちとの会話 [2:252-253]、⑥メー・スロック⁽¹³⁾の家での夕食への招待（1901年3月4日）[2:244-246]、⑦カンボジア人知事の娘の結婚式への招待（1901年5月25日）[2:254-257] などのエピソードがある。

①着任時には、すでに見たように夜のポーサット川を遡行した。午前2時に漕ぎ手た

⁽¹²⁾ 彼らはフランス植民地の下級官吏ではなく、フランスの保護下にあるカンボジア王国の官人で、前植民地期以来の伝統的なタイトルを王権から与えられていた。

⁽¹³⁾ 著者はこのメー・スロックから、馬を購入したことがあった。

ちが突然舟を停め、サーラーの杭に係留して舟を離れてしまったときには、「カンボジア人の言うことが理解できない」ために状況を把握できないまま、後に続いて上陸し、周囲に別のサンパンが停泊しているのを見て初めて、休憩であることを理解した。昼休憩では、フランス人たちとカンボジア人たちは「少し離れて」、それぞれ「パンと冷肉」、「米と塩魚」の食事をとった。このときフランス人たちはいくらかのパンと鶏肉、ラム酒を漕ぎ手たちに分け与えている。

②テトの祭りの日には、砦のアンナム人料理人であるダオ*Daô*が、「礼装を身につけ」、「靴を履き」、「立派な若鶏の周囲に、きつね色に焼いたバナナ、オレンジ、マンダリン、巨大なグレープフルーツを置いた巨大な籠」の贈り物をボーイに持たせて、兵士たちのもとを訪れた。兵士たちはダオとボーイに散歩に行く許可を与え、心づけとして数ピアストルを与えた。ダオは現地人社会の情報をフランス人に仲介する役割を果たしている。彼は③の悪霊払いの儀式的の意味を説明し、対象の患者が儀式的の夜に死亡したことを語った。⑥メー・スロック宅での夕食では、「ホストはあまりフランス語ができず、我々はそれ以上にカンボジア語を解しない」ので、ダオが通訳として同行した。メー・スロックの家は砦から3km程のストウンの正面にあり、「美しいヤシ園に囲まれた広い高床式住居」で、「驚くほど清潔」であった。招じ入れられた大部屋は7m×5mの広さで、床は「非常に細かい莫蔭」で覆われ、多数の「アヘン吸引用のマットレス」が折りたたまれて置いてあった。料理を盛るのに使われた「フランスのメーカーの揃いの皿」は、コレラ禍で死亡したフランス人官吏の遺品を、メー・スロックが競売で入手したものであった。「大きな羽の扇」を持った奴隷4人が各招待客の背後にうずくまり、給仕頭の役割の奴隷2人が料理を運んできた。ダオは少し離れたところにひかえて調理法を説明し、「素晴らしい料理であるとうけあった」が、「カンボジア料理はあまりにも香料が効いていて、見た目にも美しくないので、食欲がわかなかった」という。その内容はニョクマム *nuoc-mam*（魚醤の一種）で味付けした干し魚、茹でた豚や鶏などが巨大なサイコロ状に切られたもので、「非常に操りにくい小さな木の棒」、つまり箸を使って食べた。メー・スロックの妻たちは同席しなかった。フランス人たちはダオを通じてその理由を質問し、説明を受けた。ダオはまた、アンコール旅行にも通訳として同行し、遺跡に向かうための牛車の調達などについて、「シャム人知事」と交渉した [2:206-210,235-237]。

⑤寺での交流は、ある日、狩猟の帰りに「大きなココヤシの木がある寺」を通りかかったとき、「長い黄衣」を着た僧侶が「聞き取り難いフランス語」で呼びかけてきたことに始まる。フランス人には「オココを見ませんかvoir l'ococo」と聞こえたのだが、実際には「ココナツジュースを飲みませんかboire l'eau coco」と呼びかけられたのであった。その日以来、狩猟の帰りにその寺に立ち寄ることが習慣となった。僧侶の1人はかなり良くフランス語を話し、カンボジアの宗教、習慣に関する情報を与えてくれた。

(3) 外界の情報

ポーサットでは乾季の間、「文明化された国々で起こっている出来事」を知るための手段が電信と、牛車によって届けられる郵便物のみに限定されていた [2:141]。折しも中国で進行していた義和団事件の状況も、電信を通じてポーサットに伝わっている。回想録によると1900年6月のある日、「ペキンの公使館が攻囲され、ヨーロッパ人公使たちが中国人に虐殺されたいらしい」という情報が届いた。同月19日夕6時10分とその「6日後」にもサイゴンから電信が入り、動員可能な人数を問いあわせてきた。全員が中国行を志願するなか、28日になって、1大隊がすでにサイゴンを発ったという情報が届いた [2:168-169]。「国祭日」の翌日、7月15日に、「13日と14日の戦闘で国際軍が勝利した」という電信が入った。最後は8月20日付で、「ここ数日間」は電信が多く、それによって「連合軍がペキンに入った」ことを知ったと記されている [2:176]。

(4) 小括

以上を見るとポーサットのフランス人たちは、数百～数千倍の現地人に囲まれて数十人が暮らしており、「文明化された」世界からも、地域社会からも孤立していたようである。地理的にも遠く隔たった「文明化された」世界との接点は、主に電信によって部分的、断続的に維持されていた。周囲を取り巻く地域社会との関係では、植民地官吏も軍人も、数年程度で勤務地を移動し、土地に根を下ろすような存在ではなかった。彼らと地域の住民を仲介したのは、第1に料理人のダオや現地妻のような、フランス人の生活をサポートする職業に就き、ある程度のフランス語を使いこなすベトナム人であった。第2が知事やメー・スロックといったカンボジア王国政府の地方官人、そして僧侶など、地域社会の上層にいたカンボジア人で、多少のフランス語を使うことができる場合もあった。回想録に描かれている限りでは、第2の人々との直接的な交際は、カンボジア人の側からフランス人に呼びかけることによって始まっている。それ以外の事例では、フランス人たちは、自分たちにとって異質な宗教的儀式を、内側に参加することなく、外側から見物するのみである。現在のカンボジアの地方都市では、仏領期に建てられた市場とその周囲を取り囲む中国系商人のショップハウスが、旧市街の風景を特徴づけている。しかしフランス人がその場にいた痕跡は、旧理事官府の建物がサーラー・カエト Khet（地方役場）に転用され、その近辺に赤い瓦屋根の洋館が点在する程度にとどまっている。21世紀に入って、サーラー・カエトは、寺院や王宮に類似する「カンボジア風」の屋根を載せたビルに移行した。それでも旧理事官府の建物は残されているようであるが、その他の洋館は廃墟となったり、取り壊されて新たな建物に置き換わっていくものも多い。

おわりに

ポーサットは①タイとベトナムにつながる水陸の幹線路上にあり、②カルダモン山地からトンレー・サーブ湖側への出口にある。①の条件は少なくとも16～17世紀までさかのぼり、カンボジア和平成立以降の東南アジアの政治的・経済的環境のなかでは、今後ともポーサットの発展を促進する要因であり続けるであろう。②の条件はさらにアンコール期以前にさかのぼる可能性があり、内戦の終息とカンボジアの国際社会への復帰によって、有史以来手つかずであったカルダモン山地の開発が急速に進みつつあることで、カンボジア国内におけるポーサットの重要性を押し上げていく要因になると思われる。

本稿では文献史料に基づき、上記のような地理的条件に規定されたポーサットの「近代化」開始時点の風景を描き出してきた。最後に、この作業を進める過程で明らかになってきた、今後の研究課題を提示しておきたい。

トンレー・サーブ南西岸地域にもアンコール期以前の遺構は分布しているが、その研究は全く行われていない。アンコール期以前のポーサット地域の状況、アンコールの王権との関係、カルダモン山地の森林産物の開発状況などは全く不明である。さらにポスト・アンコール期の王都ロンヴェーク、ウドンの建設者は、明らかにポーサットと何らかのつながりを持っており、アンコール期のポーサット現地勢力のあり方を解明することで、アンコール期からポスト・アンコール期への変移の過程が明らかになる可能性が期待される。

カルダモン山地の巡察報告書には、「シャムの境界確定ミッション」がこの地域で活動していた事実が記されている。シャムとカンボジアの両勢力のはざまに位置するポーサットの人々が、シャムの政治・経済圏とどのような関係を持ってきたのかということも、歴史的に考察される必要があるだろう。1990年代末まで、タイ国境地域としてのカルダモン山地はクメール・ルージュの勢力下にあり、彼らの「経済活動」の舞台でもあった。タイとカンボジアを区切る国境地域ではなく、双方をつなぐ地域として見たときに、初めて明らかになってくる事象があるはずである。

19世紀末までトンレー・サーブ湖周辺の「中間の地域」の風景を特徴づけてきた、「象が隠れるほどの草原」は、筆者が現地調査を行った20世紀末には跡形もなく消えていた。草原の消滅はいつ頃起こり、その背景にはどのような要因があったのであろうか。植民地期の人口増はおそらく草原の開拓に関連し、その直接的な契機となったのは国道5号線のもとになった自動車道路の建設ではないかと予想される。同じく水田拡大の背景には、サイゴンからの米の輸出量の増大もあったであろう。そしてこの変化によって形作られたものこそ、20世紀末にノスタルジックに語られた「内戦前の風景」ということになる。

ポーサットの水田の風景は、現在大きく変化しつつある。1999年に筆者が現地調査を

行ったときには、農家の庭には土壁の米庫があった。2013年3月に訪れたときは、米庫は姿を消し、国道5号線沿いに数か所、粳米が集積されている場所が見られた。道路網の再建により、輸送の手段が水路から陸路に切り替わったためと思われる。では1999年に見たような米庫は、20世紀を通じて存在しつづけていたのであろうか？あるいは一旦道路や鉄道で輸送されるようになったものが、内戦による陸路網の破壊によって、20世紀初頭の状況に回帰したのであるか？そしてそう遠くない未来に、国道沿いの工場用地造成がポーサットにも到達し、水田そのものが消滅するときに訪れるのであろうか？

文献リスト

- 1: Aymonier, Etienne. 1900. *Le Cambodge*. 1. Paris. Ernest Leroux.
- 2: Abaly, Fred. 1910. *Notes et souvenirs d'un ancien marsouin. (Cochinchine-Cambodge)*. Paris. A. Leclère.
- 3: Bramel. 1916. De Pursat au Golf du Siam. *Revue Indochinoise*. 25. pp.9-20.
- 4: Geographical and Road Network Pursat Province.
- 5: 北川香子. 2001. 「カンボジア年代記と口承伝承—チャン・リエチエ王像をめぐる」『東洋学報』83(2). pp.1-32.
- 6: ក្រសួងវប្បធម៌ និង វិចិត្រសិល្បៈ/សាលាបារាំងកម្ពុជា. 2008. *បញ្ជីសារពើភ័ណ្ឌស្ថានីយបុរាណប្រទេសកម្ពុជា ខេត្ត ពោធិ៍សាត់ និង បាត់ដំបង*.
- 7: *Monographie de la province de Pursat*. 1906. Saigon. Imprimerie saigonaise.
- 8: *Monographie de la province de Pursat*. 1913. A.N.P. INDO-RSC-5203.
- 9: Morizon, René. 1936. *La Province cambodgienne de Pursat*. Paris. Les Éditions internationales.
- 10: National Institute of Statistics, Ministry of Planning. 1999. *General Population Census of Cambodia 1998 Village Gazetteer*. Phnom Penh.
- 11: Pavie, Auguste. 1884. *Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam*. Saigon. Imprimerie du Gouvernement.
- 12: ព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា វិទ្យាស្ថានប្រឹក្សា. 2000.
- 13: Résident Kompong-Chhnang (Bramel). 1915. *Tournée aux Monts des Cardamomes de l'Est et au Golge du Siam*. C.A.O.M. INDO-RSC-00391.
- 14: Résident Pursat. 1922. *Rapport de tournée dans le Khum de LEACH, LOLOCKSAR, PHSARLOEU*. C.A.O.M. INDO-RSC-00388.
- 15: Richomme. 1918. *Rapport sur les montagnes de marbre*. C.A.O.M. INDO-RSC-00388.
- 16: 宋福玩/楊文珠. 1966. 『暹羅国路程集録』Hong Kong. Southeast Asia Studies Section. New Asia Research Institute. The Chinese University of Hong Kong.

(本学教授)